

### この道を行く人なしに秋の暮

松尾芭蕉が五十一歳のとき、元禄七年九月二十三日(1694年11月10日)の窪田意専・服部土芳宛書簡の俳句。芭蕉はこの直後の十月十二日(11月28日)に死去した。

### 秋日

耿漳(8世紀)

返照入閭巷      返照 閭巷に入る  
 憂来誰共語      憂へ来たりて誰と共にか語らむ  
 古道少人行      古道 人の行くこと少に  
 秋風動禾黍      秋風 禾黍を動かす

【語注】返照…夕日の光。 閭巷…村里。 禾黍…イネとキビ。

ヘンシヨウ    リョコウにイる    シュウジツ    コウイ  
 ウレエキたりて    タレとトモにかカタらん  
 コドウ    ヒトのユクことマレに  
 シュウフウ    カシヨをウゴかす

fǎn zhào rù lǔ xiàng      yōu lái shuí gòng yǔ  
 gù dào shǎo rén xíng      qiū fēng dòng hé shǔ

二十四節気と七十二候

【秋】(立秋↓処暑↓白露↓秋分↓寒露↓)

霜降(10月23日) 旧暦九月十九日)

霜始降    霎時施    楓蔦黄

【冬】 立冬(11月7日) 旧暦十月五日)

【初候】 山茶始開    【次候】 地始凍    【末候】 金盞香

小雪(11月22日) 旧暦十月二十日)

虹蔵不見    朔風払葉    橘始黄

大雪(12月7日) 旧暦十一月五日)

閉塞成冬    熊蟄穴    鰕魚群

冬至(12月22日) 旧暦十一月二十日)

乃東生    麋角解    雪下出麦

小寒(1月5日) 旧暦十二月五日)

芹乃采    水泉動    雉始雊

大寒(1月20日) 旧暦十二月二十日)

款冬華    水沢腹堅    鷄始乳

※次の「旧正月」は2014年1月31日(旧暦甲午年一月一日)

孟冬之月、日在尾、昏危中、旦七星中。其日壬癸、其帝顓頊、其神玄冥、其蟲介、其音羽、律中应鍾、其数六、其味鹹、其臭朽、其祀行、祭先腎。水始冰、地始凍。雉入大水為蜃。虹藏不見。

孟冬の月、日は尾に在り、昏に危中し、旦に七星中す。其の日は壬癸、其の帝は顓頊、其の神は玄冥、其の虫は介、其の音は羽、律は应鍾に中り、其の数は六、其の味は鹹、其の臭は朽、其の祀は行、祭るに腎を先にす。水始めて氷り、地始めて凍る。雉、大水に入りて蜃と為る。虹、藏れて見えず。

ライキ、ガツリヨウダイロクより。

モウトウのツキ、ヒはビにアリ、コンにキ、チュウシ、アシタにシチセイ、チュウウす。ソのヒはジンキ、ソのテイはセンギョク、ソのシンはゲンメイ、ソのムシはカイ、ソのオンはウ、リツはオウシヨウにアタリ、ソのスウはロク、ソのアジはカン、ソのシユウはキユウ、ソのシはコウ、マツるにはジンをサキにす。ミズ、ハジめてコオリ、チ、ハジめてコオる。キジ、タイスイにイリてシンとナる。ニジ、カクれてミえず。

【語注】孟冬……冬の初め 尾・危・七星……天文用語で星の「二十八宿」の名前。 壬癸……「みずのと」「みずのえ」。十干のうち五行の「水」にあたる 帝……主任的な神 神……副主任的な神 蟲……「むし」「動物」。本来は「虫」とは別の字。 介……「魚介類」の「介」。 羽……音楽用語で「ドレミファ」の「ラ」にあたる音。 应鍾……音楽用語で「十二律」の十二番目の音。 行……旅行 蜃……「蜃気楼」の「蜃」。ミズチないし巨大なハマグリ。

周興嗣(470?~521)「千字文」より

寒来暑往 寒さ来たれば暑さ往き

秋收冬蔵 秋に収め冬に蔵す

シユウコウシ「センジモン」より。

サムさきたれば アツさユキ  
アキにオサメ フユにゾウす

カンライシヨオウ、 hán lái shǔ wǎng

シユウシユウトウゾウ。 qiū shōu dōng cáng

藤原公任撰『和漢朗詠集』（1013年ごろ）

三五六 冬夜

一盞寒灯雲外夜 一盞の寒灯は雲外の夜  
数盃温耐雪中春 数盃の温耐は雪の中の春

フユのヨ

イッサンのカントウは ウンガイのヨ  
スハイのウンチュウは ユキのウチのハル

yī zhǎn hán dēng yún wài yè

shù bēi wēn nài xuě zhōng chūn

【参考・白居易||白楽天の原詩】

「和李中丞与李给事山居雪夜同宿小酌」 白居易(772~846)

憲府触邪峨豸角、瑣闥駁正犯竜鱗。那知近地齋居客、忽作深山同宿人。  
一盞寒灯雲外夜、数盃温耐雪中春。林泉莫作多時計、諫獵登封憶旧臣。

『和漢朗詠集』三五八 貫之

おもひかね妹いもがりゆけば冬の夜の川風さむみ千鳥ちどりなくなり

冬夜読書 冬夜、書を読む

菅茶山(1748~1827)

雪擁山堂樹影深 雪は山堂を擁して 樹影深し  
檐鈴不動夜沈沈 檐鈴 動かず 夜沈沈  
閑收乱帙思疑義 閑かに乱帙を収めて 疑義を思ふ  
一穗青灯万古心 一穗の青灯 万古の心

トウヤ ショをヨむ カンサザン(カンチャザン)

ユキはサンドウをヨウして ジュエイ フカシ

エンレイ ウゴかず ヨル、チンチン

シズかにランチツをオサめて ギギをオモウ

イツスイのセイトウ バンコのココロ

【語注】檐鈴…軒下の鈴 帙…和本を入れる箱のようなカバー

左遷至藍関示姪孫湘

左遷せられて藍関に至り姪孫湘に示す

韓愈（768～824）

一封朝奏九重天 一封 朝に奏す 九重の天  
夕貶潮州路八千 夕べに潮州に貶せらる 路八千  
欲為聖明除弊事 聖明の為に弊事を除かんと欲す  
肯將衰朽惜殘年 肯て衰朽を將て 殘年を惜しまんや  
雲橫秦嶺家何在 雲は秦嶺に横たはりて 家 何くにか在る  
雪擁藍関馬不前 雪は藍関を擁して 馬前まず  
知汝遠來応有意 知る 汝が遠く来る 応に意有るべし  
好收吾骨瘴江辺 好し 吾が骨を収めよ 瘴江の辺に

サセンせられてランカンにイタリ、テツソン、シヨウにシメす。カンユ。イップウ アシタにソウス キユウチヨウのテン／ユウベにチヨウシユウにヘンせらる ミチ ハツセン／セイメイのタメに ヘイジをノゾかんとホツス／アエてスイキユウをモツて ザンネンをオしまんや／クモはシンレイにヨコたわりて イエ イズくにかアる／ユキはランカンをヨウして ウマ ススまず／シる ナンジがトオクキタる マサにイアるべし／ヨし ワがホネをオサめよ シヨウコウのホトリに

【語注】左遷：韓愈は五十二歳のとき刑部侍郎から潮州刺使に左遷された。

姪孫湘：韓愈の甥の子、韓湘。

○『常山紀談』「稲葉一徹文学に依て死を免れし事」

※稲葉一鉄（1515～1589）

稲葉伊予守一徹、織田信長に従ひけれども、信長、心解ず。数寄屋にて茶を賜はり、其の席にて刺殺すべしとの巧なり。一徹、数寄屋に入る時、相伴の三人、挨拶に「掛物の絵を讀給へ」といふ。是は韓退之の詩にて「雲横秦嶺家何在、雪擁藍関馬不前」といふ句なり。一徹、少し学問ありて読けるに、相伴、其故を問ふ。一徹から／＼子細を咄しければ、信長、壁越に是を聞き、つと走出て「一徹には荒勝負ばかりする勇士と思ひしに、今聞く処、文学にも達せり。奇特の事感ずる余りに実を語るべし。今日のもてなしは茶の湯にあらず。其方を刺殺さんとせし巧みなり。相伴の三人、皆、懐劍を差したり。今日より永く我に従ひて謀を致されよ。ゆめ／＼害心を止たり」と云はれければ、三人の相伴、懐より小脇差を取出す。一徹平伏して「死罪を御免下され候事 忝候。私も内々、今日殺さるべきにて候はんと察し申候へば、詮方なく是非一人相手を取可申と存、用意仕候」とて、是も懐劍を取出して、信長に見せ申しければ、信長いよ／＼其の心がけを誉られけり。